

ダニエル書 - 第百十五番

最後の世代の預言的な特徴を解き明かす

Jeff Pippenger

2024-03-04

見過ごされつつある民の最後の世代において、いくつかの預言的な特徴が見いだされる。彼らはまむしのすえである。サタンの品性を形づけているからだ。彼らは姦淫の世代である。神の敵と不聖なる結びつきを結んだからだ。彼らは見てはいるが理解できず、聞いてはいるが悟ることができないところに達している。回心していないからであり、それは彼らの心が肥え太ることとして表されている。この現象を最初に取り上げたのはモーセであった。

モーセは全イスラエルを呼び集め、彼らに言った。「あなたがたは、主がエジプトの地で、ファラオとそのすべての家臣、そしてその全土に対して、あなたがたの目の前でなされたすべてのことを見た。すなわち、あなたがたの目が見た大いなる試練、しるし、そして大いなる奇跡である。しかし、今日に至るまで、主はあなたがたに悟る心、見る目、聞く耳をお与えにならなかった。」申命記 29:2-4.

見ることと聞くことに関するラオデキア的な現象の最初の言及において、神の民が見ることができないのは、自分たちの土台となる歴史におけるしるしと不思議である。エレミヤは、この現象を終わりの日の「愚かな乙女たち」の特徴であり、また、創造主なる神を恐れよという第一の天使の告知から始まる三天使のメッセージを彼女たちが受け入れることを拒むことの表れとして位置づけている。この背きのゆえに、彼女たちは後の雨を受けない。

ヤコブの家にこれを告げ、ユダでこれを宣べよ。こう言え、愚かで悟りのない民よ、このことを今聞け。目がありながら見ず、耳がありながら聞かない者たちよ。あなたがたはわたしを恐れないのか、と主は言われる。わたしの前におののかないのか。わたしは海に砂を永遠の定めとしてその境とし、それを越えることができないようにした。波が荒れ狂っても、それに打ち勝つことはできず、どれほどとどろいても、それを越えることはできない。

しかしこの民は、背信し背く心をもっている。彼らは背き去ってしまった。彼らは心のうちに言わない、「今こそ、時にかなって前の雨も後の雨も与え、収穫の定められた週をわたしたちのために保っておられる、われらの神、主を恐れよう」と。あなたがたの不義がこれらのことを退け、あなたがたの罪が良いものをあなたがたから差し止めたのだ。エレミヤ書 5:20-25.

エゼキエルは、「見ても悟らない」と表される特性を示す者たちを「反逆の家」と呼ぶ。彼らは、自分たちの土台の歴史を見ようとしない反逆の家であり、愚かな乙女であって、第一の天使のメッセージを拒むゆえに回心していない。第一の天使のメッセージを受け入れないなら、第二も第三も受け入れられないのだから、第一を拒むことはすべてを拒むことにほかならない。この状態では、後の雨の時であっても、これらの乙女には後の雨が注がれない。イエスはご自身の語りの中でこの特徴に言及した後、続いて「種まく人の

たとえ」を語られた。

しかし、あなたがたの目は見ているゆえに幸いであり、あなたがたの耳は聞いているゆえに幸いである。まことにあなたがたに言う。多くの預言者や義人たちは、あなたがたが見ていることを見たいと願ったが見られず、あなたがたが聞いていることを聞きたいと願ったが聞けなかった。だから、種を蒔く者のたとえを聞きなさい。たれでも御国のことばを聞いて悟らないと、悪い者が来て、その人の心に蒔かれたものを奪い去る。これが道ばたに蒔かれたものです。石地に蒔かれたものとは、ことばを聞くとすぐに喜んで受け入れる人のことだ。しかし、自分のうちに根がなく、しばらくの間だけ続く。ことばのために患難や迫害が起こると、すぐにつまずいてしまう。いばらの中に蒔かれたものとは、ことばを聞くが、この世の思い煩いと富の惑わしがことばをふさぎ、実を結ばない人のことだ。良い地に蒔かれたものとは、ことばを聞いて悟る人のことで、その人は実を結び、ある者は百倍、ある者は六十倍、ある者は三十倍の実を結ぶ。また、別のたとえを彼らに語られた。「天の御国は、自分の畑に良い種を蒔いた人に似ている。人々が眠っている間に、その人の敵が来て、麦の間に毒麦を蒔いて行き、そして去って行った。芽が出て実を結ぶと、毒麦も現れた。そこで家の主人のしもべたちが来て彼に言った、『ご主人さま、あなたは畑に良い種をお蒔きになったではありませんか。では、どうして毒麦があるのですか。』

彼は彼らに言った、『敵がしたのだ。』

しもべたちは言った、『それなら、私たちが行ってそれを抜き集めましょうか。』しかし彼は言った、『いや、毒麦を集めるうちに、麦まで一緒に抜き取ってしまうかもしれない。収穫まで両方とも一緒に育つままにしておきなさい。収穫の時になったら、刈り手たちに、まず毒麦を集め、焼くために束ねよ、と言い、麦は私の倉に集めなさい、と言おう。』」マタイによる福音書 13:16-30。

愚かな者は毒麦で、賢い者は小麦である。十人の乙女のたとえでは、油を持っているかどうか二つの階級の区別を明らかにし、小麦と毒麦の場合には、その区別は種、すなわち御言葉が理解されるかどうかに基づいている。見ないがゆえに理解しない階級についての最初の言及はモーセによってなされ、理解されるべきメッセージを、土台となる歴史のしるしと不思議として位置づけている。エレン・ホワイトによる反逆の家の盲目の要素に関する最後の預言的言及は、すべての義人が見たいと願ったものを見る祝福を受けた目が見たのはミラー派運動の歴史であったことを示している。

1840年から1844年に与えられたすべてのメッセージは、今こそ力をもって示されるべきである。多くの人々が方向を見失っているからである。これらのメッセージは、すべての教会に届けられなければならない。

キリストは言われた。「あなたがたの目は見ているゆえに幸いであり、あなたがたの耳は聞いているゆえに幸いである。まことにあなたがたに言う。多くの預言者と義人たちは、あなたがたが見ていることを見たいと望んだが、見ることができず、あなたがたが聞いていることを聞きたいと望んだが、聞くことができなかった。」[マタイ13章16、17節]。1843年と1844年に見られた事柄を見た目は幸いである。Manuscript Releases 第21巻、436、437。

イエスはいつも、初めを用いて終わりを示される。目がありながら見えず、悟らない者たちへの最初の言及と最後の言及は、背きの家の土台となる歴史が見られていないがゆえに退けられ、そのため愚かな者たちが後の雨を認識できなくなることを明らかにしている。1840年から1844年の歴史は、古代イスラエルがエジプトの束縛から解放された出来事を型として示されていた。古代イスラエルが最初の試練の過程を通過できなかったことは、彼らをカデシュへともたらし、そこで彼らは十人の斥候の虚偽の報告を受け入れ、エジプトへ引き返すための新しい隊長を選んだ。四十年後、彼らは再びカデシュに連れ戻され、モーセは岩を二度打つという失敗を犯した。

モーセは失敗したが、それでもヨシュアは彼らを約束の地へと導いていった。カデシュでの最後の試練には深刻な反逆が伴っていた。というのも、イエスはいつも初めによって終わりを示されるからであり、四十年の初めにカデシュで起こった十人の斥候の反逆は、四十年の終わりにおけるカデシュでの大いなる反逆をも示しているからである。それでも、カデシュでのモーセの反逆にもかかわらず、約束の地に入るという幻はもはや遅らされることはなかった。

1863年の反逆において——それは1888年のさらなる反逆へ、さらに1919年の一層の反逆へとつながり、ついには1957年の反逆に結実した——イエスはラオデキアのアドベンチズムをカデシュへと連れ戻した。彼は、第三天使が到来して試練の過程を開始した、その結果として最終的に1863年の反逆と、ラオデキアの荒野をさまようという追放が現れ出たあの歴史へと、彼らを連れ戻した。第三天使は、黙示録18章の力ある御使い、すなわち第三天使が降りてきた2001年9月11日に、ラオデキアのアドベンチズムの終局の歴史に入ってきた。そのとき彼は、ニューヨーク市のタワーが打ち倒されたとき、ニムロデの塔の打倒に象徴されているように、バビロンが倒れたと宣言した。

「第三の天使のメッセージは、その前進する栄光のうちを歩むことを拒む者たちには理解されず、地上をその栄光で照らす光は、彼らによって偽りの光と呼ばれるだろう。」レビュー・アンド・ヘラルド、1890年5月27日。

古代イスラエルにおいてそうであったように、現代イスラエルにおいても同様である。2001年9月11日を目の当たりにした世代は最後の世代である。イエスはルカによる福音書21章で「この世代」と語り、その世代を、天と地が過ぎ去るときに生きている人々だと示された。それは再臨の時に起こる。キリストの再臨を目の当たりにするまで生きるその世代は、自分たちが最後の世代であることを証明するしるしを見いだしているはずだ。彼らは、「すべての幻の成就」がもはや「引き延ばされ」ない時に自分たちが生きているのだと知り、理解するだろう。

イエスが弟子たちと共に神殿を出て行かれると、彼らは、神殿の破壊について語られたことが何を意味しているのか、説明して下さるようお願いした。その会話は、最後の世代において彼の弟子たちが交わす会話を表していた。弟子たちは、間もなくやって来る日曜法の時に、そこにいる礼拝者たちが彼の口から吐き出され、もはや彼に代わって語る者ではなくなるため、ラオデキアのアドベンチスト教会は一掃されることになる、と彼が繰り返し教えてこられたことの意味を理解したいと願っていた。

弟子たちに答えて、イエスはエルサレムの滅びと、その後続く歴史を、世の終わりに至るまで説明した。十九節までの歴史的概観を述べたのち、イエスはエルサレムの滅びを取り上げたが、それは本来なら十字架の時に起こり得た滅びであった。しかし神のあわれみと忍耐によって、およそ四十年先送りにされた。その四十年の終わりには、滅びを免れる残りの者がいるだろうが、ただし、イエスがそのとき与えたしるしを認めるならば、という条件付きであった。

古代イスラエルの初めには四十年の期間があった。その端緒は十人の斥候の反逆に対する裁きであったが、モーセの執り成しのゆえに、その裁きは四十年間猶予された。古代イスラエルの終わりにも、十字架に対する反逆への裁きがあったが、キリストの長い忍耐とあわれみによる執り成しのゆえに、それは四十年間猶予された。どちらの歴史にも、逃れた残りの者がいた。イエスはいつも、物事の始まりを用いて、その終わりを示される。

イエスはエルサレムの滅亡に関連するしるしについて語り、それを「復讐の日々」と呼んだ。

やがてあなたがたがエルサレムが軍勢に包囲されるのを見るとき、その荒廃が近いことを知りなさい。そのとき、ユダヤにいる者は山へ逃げ、都の中にいる者はそこから出て行き、地方にいる者はそこへ入ってはならない。というのは、これらは、書かれているすべてのことが成就するための報復の日々だからである。ルカ 21:20-22。

「復讐の日」とは最後の七つの災いのことであり、そのためシスター・ホワイトはエルサレムの滅亡を、終わりの日の神の執行審判と結びつけている。

近づいて聞け、諸国の民よ。耳を傾けよ、すべての民よ。地よ、聞け、その中にあるすべてのものよ。世界よ、そこから出るすべてのものよ、聞け。主の憤りはすべての国々の上にあり、その激しい怒りは彼らのすべての軍勢の上にある。主は彼らをことごとく滅ぼし、彼らを屠りに渡された。彼らの殺された者もまた投げ捨てられ、その死骸から悪臭が立ちのぼり、山々は彼らの血で溶ける。天の万象はことごとく消えうせ、天は巻物のように巻き取られる。天の万象は皆落ち、ぶどうの木から葉の落ちるように、いちじくの木から実が落ちるように。わたしの剣は天で浴びる。見よ、それはエドムの上に、また、わたしの呪いに定められた民の上に、裁きとして降り下る。主の剣は血に満ち、脂で肥え、小羊とやぎの血、雄羊の腎臓の脂で満ちる。主はボツラでいけにえを備え、エドムの地には大いなる殺戮があるからだ。一角獣も彼らとともに下って来、若い雄牛も雄牛とともに下って来る。彼らの地は血に浸され、塵は脂で肥やされる。それは主の復讐の日、シオンの争いに対する報いの年である。

イザヤ書34章1-8節。

イエスはナザレで最初の公の宣言を行い、自らをメシアであると告げた。その宣言は、預言的に「初出の原則」に基づいていた。彼が選んで朗読した箇所は、彼の務めに「主の報復の日」を告げ知らせることが含まれていることを示していた。これは、イザヤによれば、「シオンの訴えのための報いの年」でもある。

ナザレで、キリストは公の働きを始め、自らがメシアであることを宣言された。そのとき、彼の言葉を聞きながら悟らなかつた人々は、彼を山から突き落として殺そうとした。彼の働きの始まりは、故郷の人々が彼を殺そうとしたことで特徴づけられ、働きの終わり

には、彼の民が実際に彼を殺した。彼の働きの目的は、自らがメシアであることを明らかにすることであり、洗礼において油注がれたとき、彼はメシアとなられた。彼の洗礼のとき、神のしるしが下り、来るべきメシアに関する予言の成就を確認した。1840年8月11日にも、神のしるしが下り、その歴史における試みのメッセージに関する予言を裏づけた。そして2001年9月11日にも、神のしるしが下り、その歴史において予言されていたメッセージ、すなわち後の雨のメッセージを裏づけた。

サマリア人たちとともに二日間働いたのち、イエスは彼らのもとを去り、ガリラヤへの旅を続けた。少年期と若き日の初めを過ごしたナザレには、足をとどめなかった。そこで彼が自らを「油注がれた者」と宣言したとき、会堂での受け入れはあまりに芳しくなかったため、彼は、より実り多い地を求め、聞く耳を持ち、そのメッセージを受け入れる心に向かって説教することに決めた。彼は弟子たちに、預言者は自分の郷里では敬われない、と告げた。この言葉は、彼らの只中でひっそりと暮らし、幼少のころから親しく知っている者のうちに、驚くほど称賛に値する成長が見られても、それを認めることに多くの人々が抱く自然なためらいを示している。同時に、同じ人々が、見知らぬ者や冒険家の大仰な主張には、ひどく興奮することもありうる。

ルカによる福音書第21章で、キリストは死を見ない最後の世代である十四万四千人を特定している。彼は、かつては御父の家であったがのちにはユダヤ人の家となっていた場所を最後に訪れたことから始まる歴史を語ることによって、それを明らかにした。イエスが語り始めたその歴史の叙述の中で、彼は、エルサレムと、弟子たちが知りたがっていた神殿が滅ぼされる時点（紀元70年）にまで至った。彼はその滅びを「復讐の日々」と位置づけたが、それは彼の宣教の冒頭における宣言の一部でもあった。「復讐の日々」は、紀元70年のエルサレムの滅亡だけでなく、最後の七つの災いに表される神の怒りの時期も意味していた。

これは万軍の主なる神の日、復讐の日、彼が自らの敵に復讐を果たすための日である。剣は食らい、満ち足り、彼らの血に酔う。なぜなら、万軍の主なる神には、ユーフラテス川のほとり、北の地にいけにえがあるからである。エレミヤ書 46章10節。

「北の地、ユーフラテス川のほとりでのいけにえ」によって表されている、バビロンに対する「復讐の日」は、まもなく施行される日曜法をもって始まる。

主の怒りのゆえに、それは住まわれることがなく、全く荒れ果てる。バビロンを通り過ぎる者は皆、驚き、彼女のすべての災いに口笛を鳴らす。周囲からバビロンに向けて戦列を整えよ。弓を張る者は皆、彼女に向けて射よ。矢を惜しむな。彼女は主に対して罪を犯したからだ。周囲から彼女に向かって叫べ。彼女は手を差し出した。彼女の基は倒れ、城壁は打ち倒された。これは主の復讐である。彼女に復讐せよ。彼女がしたとおりに彼女にせよ。バビロンから種をまく者、刈り入れの時に鎌を扱う者を断ち絶て。虐げる剣を恐れて、彼らは皆それぞれ自分の民のもとへ帰り、各々自分の地へ逃げるであろう。イスラエルは散らされた羊。獅子たちが彼を追い払った。まずアッシリアの王が彼を食い尽くし、最後にバビロンの王、このネブカドネザルがその骨を打ち砕いた。ゆえに、万軍の主、イスラエルの神はこう言われる。見よ、わたしはアッシリアの王を罰したように、バビロンの王とその地を罰する。わたしは再びイスラエルをその住まいに連れ帰り、彼はカルメルとバシャンで草を食み、その魂はエフライムの山と

ギレアデで満ち足りる。その日、その時に、と主は言われる、イスラエルの不義は捜してもなく、ユダの罪も見いだされない。わたしが残した者たちを赦すからである。メラタイムの地に、まさにそれに向かって、またペコドの住民に向かって攻め上れ。彼らを荒らし、彼らの後に至るまで全く滅ぼせ、と主は言われる。わたしが命じたすべてにしたがって行え。国には戦の響きがあり、大いなる滅びの声がある。全地の金槌はいかに断たれ、砕かれたことか。バビロンはいかに諸国の中で荒れ果てたことか。わたしはおまえのために罫を仕掛けた。バビロンよ、おまえは捕らえられ、気づかなかった。おまえは見つかり、また捕らえられた。おまえが主に逆らったからだ。主はその武器庫を開き、その憤りの武器を取り出された。これはカルデヤの地における万軍の主なる神のわざである。果てから彼女に向かって来い。彼女の倉を開け。彼女を土の山のように積み上げ、ことごとく滅ぼせ。彼女のうちに何一つ残すな。彼女の若い雄牛を皆殺せ。彼らをほふり場に下らせよ。ああ、彼らはわざわいだ。彼らの日が来たからだ。臨みを見る時が。バビロンの地から逃れて脱出する者たちの声がある。シオンで、われらの神、主の復讐、その宮の復讐を告げ知らせるために。射手たちを呼び集めてバビロンに向かわせよ。弓を張る者は皆、周囲に陣を敷け。ひとりも逃がすな。そのしわざにしたがって彼女に報いよ。彼女がしたすべてにしたがって彼女に行え。彼女が主に、イスラエルの聖なる方に対して高ぶったからだ。エレミヤ書 50:13-29。

西暦70年のエルサレムの滅亡は、バビロンの大淫婦に対する執行審判を表しており、その審判は米国でまもなく制定される日曜法から始まる。イエスは、ご自身が西暦70年を、差し迫る日曜法として指し示しておられることを知っておられた。というのも、主はご自身の御言葉の著者であり、また御言葉そのものだからである。最後の世代が到来したことを示すしるしが何であるかを理解するためには、ルカによる福音書21章でイエスが示された預言の背景を認識することが重要である。

次回の記事でこの研究を続けます。

キリストの再臨は、この地上の歴史の最も暗い時期に起こる。ノアとロトの日々は、人の子の来臨の直前における世界の状態を描いている。聖書は、この時を見据えて、サタンがあらゆる力をもって、また「不義のあらゆる欺き」をもって働くと言明する。2 Thessalonians 2:9, 10. 彼の働きは、急速に深まる暗闇、この終わりの時代における数多の誤謬、異端、惑わしによって、明白に示されている。サタンは世界を虜にしているだけでなく、その欺きは、私たちの主イエス・キリストに属すると公言する教会をも、パン種のように浸透させている。大いなる背教は、真夜中のように深い闇へと発展する。神の民にとって、それは試練の夜、涙の夜、真理のゆえの迫害の夜となる。しかし、その暗黒の夜から、神の光が輝き出る。

彼は「暗闇から光が輝き出る」ようにする。コリント人への第二の手紙 4:6. 「地は形がなく、空虚で、深淵の面に暗闇があった」とき、「神の霊が水の面を動いていた。神は言われた、『光あれ。』すると光があった。」創世記 1:2, 3. このように、霊的な暗闇の夜にも、神の言葉は「光あれ」と語られる。ご自分の民には、こう言われる。「起きよ、輝け。あなたの光が来て、主の栄光があなたの上に昇ったからだ。」イザヤ書 60:1.

「『見よ』と聖書は言う。『闇が地をおおい、深い闇が民をおおう。しかし主はあなたの上に輝き、その栄光があなたの上に現れる。』」2節。キリストは、御父の栄光の輝き

であり、この世に光として来られた。彼は人々に神を示すために来られ、彼については『聖霊と力によって油注がれ』『善を行って巡り歩かれた』と記されている。使徒行伝 10:38. ナザレの会堂で彼は言われた。『主の御霊がわたしの上にある。貧しい者に福音を告げ知らせるために、主はわたしに油を注がれた。心の碎けた者をいやすために、捕らわれ人には解放を、盲人には目の開かれることを告げ、打ち碎かれている者を自由にし、主の恵みの年を告げ知らせるために、わたしを遣わされた。』ルカ 4:18、19. これは、彼が弟子たちに委ねられた働きであった。『あなたがたは世の光である』と彼は言われた。『このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせなさい。そうすれば、人々はあなたがたの良いわざを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるであろう。』マタイ 5:14、16. 『預言者と王たち』217、218.]